

これは、授業のみならず、すべての教育活動において、意識されるべきことです。学校の全教育活動、そこに携わる大人は、共通理解し、共通実践していくこととなります。メンバーが代わっても、継続していく教育活動でなければなりません。“振り返り”では、自分の成長をしっかりと意識し、成長欲求を満たすことができるように、大人のサポートが必要です。そして、“学び”“学び合い”が習慣として身についた時、成長欲求を満たす活動は、内発的に動機づけられ、大人の手を離れていきます。このことが、生涯にわたって“とことん学び続け、とことん学び合う人”へとつながっていきます。

冒頭で抜粋した、今後予想される社会においては、このような子供を育てていくことが重要になると考えます。学校を「子供たちが受け身で教えてもらうだけの場」にするのか、それとも、「子供たちの成長欲求を満たす学びの場」にするのかで、教育効果は大きく変わります。

(2) 「自ら学び続け学び合う子供」を育む教師の役割

中央教育審議会答申による「令和の日本型学校教育」においては、『個別最適な学び』と『協働的な学び』を一体的に充実し『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善につなげる」ことが求められています。このことを踏まえると、私たちは、教師の役割を「子供の自ら学び続け学び合う姿を支える」つまり、「内発的に動機付けられた学びとなるようにコーディネートする」こととらえています。

子供が自ら学び成長していくための原動力（エネルギー）である「成長欲求」に基づき、自らの成長に気付きながら、次の「学び」につなぎ生かしていく姿、つまり「自ら学び続け学び合う子供」の姿と「教師の役割」を次のように表しました（図2）。

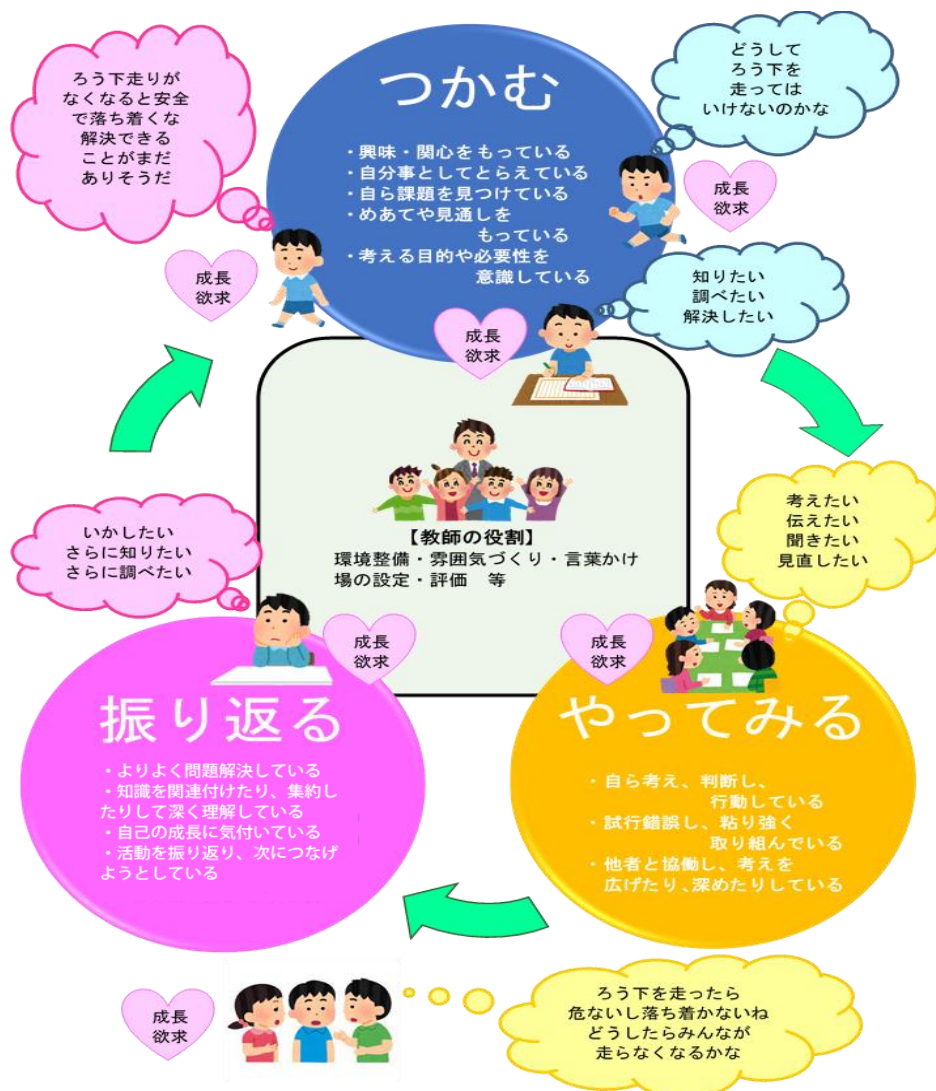


図2 「自ら学び続け学び合う子供」と教師の役割

子供は誰もが「どうして～かな」「どうしたら～かな」「～たい」「～したい」という成長欲求をもって日常生活を送っています。私たち教師は、その成長欲求を満たすために、どのような支援（環境整備、雰囲気づくり、言葉かけ、場の設定、評価等）ができるのか考えることが重要です。

学びの機会は日常生活の中に溢れています。このガイドブックは、「自ら学び続け学び合う子供」を育てるために、日々の教育活動の中で意識し、取り組んでもらいたいことをまとめています。私たち教師も「自ら学び続け学び合う子供」を育てるという視点で、現在の教育活動を見直してみましよう。

教師が「教える」だけでなく子供自らが「学ぶ」にはどうすればよいか、まずは、私たち教師自身の意識を変えていきましょう。